

15 世界航海の^{キャビン}船室と無人島の^{キャビネット}陳列室

—ロビンソン漂流譚と自然科学—

森 貴 史
Takashi MORI

1 『ロビンソン・クルーソー』と18世紀探検航海時代

大航海時代といわれるクリストファー・コロンブス（1451-1506）の活躍した15世紀末から16世紀前について、18世紀後半は、いわば第2次大航海時代ともいうべき時期となった。この啓蒙の世紀に活躍したのは、おもにジェームズ・クック（1728-1779）やルイ-アントワヌ・ド・ブーガンヴィル（1729-1811）を中心とするイギリスやフランスの海軍将校たちである。国家から託されたかれらの任務とは、さまざまな地理学上の探索と発見であって、かれらによって、地理学は飛躍的に発展を遂げた。これを可能にしたのは、経度を計測するための精確なクロノメーターの開発、天文学と数学の発展、操船が容易で積載量が多い船の建造を可能にした造船術の進歩、訓練と教育を施された海軍士官などである。

これらの航海の目的は、南太平洋諸島、当時は存在するとまだ信じられていた巨大な南方大陸、ユーラシア大陸東端とアメリカ大陸西端の地理的關係、ヨーロッパとアジア東端を結ぶ北方航路などの探索であった。この時代を経たのちの19世紀には、現在のわれわれが知っている世界地図の海岸線はほぼ確定されることになったのである。

クックたちの世界航海で収集されたのは、地理学に関するものばかりではない。非ヨーロッパ世界の動物や植物などの自然、およびその住民たちや文化といったいわゆる博物学や人類学に関する知識も圧倒的な熱量によって膨大な範囲で収集されていたのだ。知識の収集とその有用性への確信という啓蒙主義の理念が、国家事業としての探検航海と、みごとな結合を果たした成果だといえるだろう。

こうして収集された博物学および地理学のデータと航海日誌はもちろんのこと、探検航海の成果である非ヨーロッパ世界の情報は、航海記として新規に著されて出版されるのが通常であった。それら18世紀の探検航海記が同時代の文学シーンにあたえた

影響の大きさを知ることができる最大の証左は、ダニエル・デフォー（1660-1731）の『ロビンソン・クルーソー』（1719年）を生み出したことであろう。ひとりの近代ヨーロッパ人が無人島で孤独に生き抜くさまを描いた、このデフォーの小説は、のちの300年間のあいだに、とくにドイツ語圏では大きな展開をみせて、「ロビンズナーデ」（Robinsonade、ロビンソン・クルーソー風の物語や小説、難破者の冒険譚）とよばれる巨大な文学ジャンルを形成するにいたるのである。

つまり、デフォーの『ロビンソン・クルーソー』を嚆矢とした18世紀の探検航海記とロビンズナーデとの関係は、その邂逅の時点からすでに決定的な起点となっていたわけであるが、その後さらに、この関係はインターテクスチュアルに、たがいのジャンルに影響を及ぼし合いながら、融合を繰り返すという生成作用のなかで、近代を通じて続いていくのだ。

2 デフォーによるフィクションへの書き換え

ロビンズナーデというジャンルは、すでにさまざまな形式で分化しながらも、現代にも生き続けている。デフォーのオリジナルである『ロビンソン・クルーソー』だけで、さまざまな版や改版がすでに存在しており、国連カタログによると、そのリストが54頁に及ぶ¹⁾。20世紀前半のロビンズナーデ研究者ヘルマン・ウルリヒによれば、オリジナルが出版された1719年に5種の版、翻訳もオランダ語版が1719年、その翌年にはフランス語版およびドイツ語版が発行されていた²⁾。すなわち、デフォーのオリジナル小説とともに、無数のヴァリエーションのロビンソンがこれまで300年間、世界中で読まれてきた。したがって、『ロビンソン・クルーソー』というテキストによって、ダニエル・デフォーは冒険小説のもうひとつのジャンルを切り開いたといえるだろう。

ところで、ひとりのヨーロッパ人の無人島生活を描写するこの小説は、もともとすべてがフィクションではなく、参考資料になったとされる記録が存在していることはよく知られていて³⁾、それはなかでも1712年に出版されたウッズ・ロジャーズ（1679-1732）の『世界巡航記』に記載されているアレクサンダー・セルカーク⁴⁾の記事とされている。ロビンソン・クルーソーのモデルになったといわれた、このスコットランド出身の水夫が、南アメリカのチリ沖に浮かぶホアン・フェルナンデス島で孤独のなかで4年間をどのように暮らしたかについて、この記事は詳しく伝えている。しかし問題は、ロジャーズの船員たちに発見されたさいのセルカークの状態に関する記述

であって、それはデフォーが描写したロビンソンのイメージに対して、大いなる相異を提示していることに着目しなければならない。

「すると間もなく、わがピナス艇が岸から引き返してきた。艇にはザリガニがたっぷりと、なんとヤギの毛皮を縫い合わせたものを身につけている男が一人乗っていた。その男は、毛皮の本来の主のヤギより、もっと野生の生き物のように見えた。[……] セルカークが救出され、はじめてわれわれの船に上がったとき、長い間、英語を口にしていなかったのも、彼の英語自体がすっかり錆びついてしまい、彼が何かしゃべっても片言のように聞こえ、われわれには意味が通じないほどだった」⁵⁾

この記録がわれわれに教えてくれるのは、セルカークが無人島でけって文明的な生活を送っていたのではなく、むしろ文明とはほど遠いような生活、母語がうまく話せなくなるほどに野蛮で動物的な暮らしをおくっていたことなのだ。これに対して、デフォーがその小説で描いたのは、あくなき努力と勤勉によって、人間の手が加えられていない原初の自然で覆われた島を、文明によって暮らしやすく変えていく主人公の姿であるというところに、この大きな相異の意味がある。すなわち、デフォーがつくりあげたロビンソン・クルソー像とはヨーロッパの英雄像であって、倦むことなき刻苦精励によって荒野を開拓していくという啓蒙主義の理念にも合致しており、またそれを体現する者なのである。

それゆえ、最初のオリジナルのロビンゾナーデ自体がすでに「リアル」なフィクションであった。デフォーは、無人島で未開人あるいは動物と化していたヨーロッパ人を、孤独に文明を築いていく近代人へと書き換えたのである。

デフォーがおこなった事実と想像力の産物との結合によって、あの難破者の無人島でのサバイバルという物語は、未開 (Wildheit) と文明 (Zivilisation) との対比を描き出す機能をもった冒険小説の新ジャンルの基礎をなしたのである。

本稿の目的は、おもに 18 世紀後半から 19 世紀後半までのロビンゾナーデ、そのなかでも特徴的なテキストを中心に、18 世紀の探検航海記とロビンゾナーデとのインターテクスチュアルな関係を見いだし、分析していくことにある。次章からは、科学的な航海日誌や航海記のドキュメントのスタイルや内容が、フィクションであるロビンゾナーデの叙述方法に、どのような影響をあたえたかを検証していく。この分析の過程ではとくに、啓蒙主義のもうひとつの理念である「教育」という要素、「未開」と「文明」の対比、「島」というトポスについても言及されることになるだろう。



図版1 ダニエル・デフォーの初版『ロビンソン・クルーソー』（1719年）の挿絵。このロビンソンは裸足であるものの、ヨーロッパ製の銃2丁と剣1振りを持っている。David Blett: The illustration of Robinson Crusoe 1719-1920. Gerrards Cross: Colon Smythe 1995, S. 26.

3 ロビンゾナーデのレトリック

18世紀後半にクックやブーガンヴィルによって遂行された探検航海の特質は、天文学者、博物学者、画家を同行させていたことにある。ブーガンヴィルは博物学者フィリベール・コメルソン（1727-1773）、天文学者ピエール-アントワーヌ・ヴェロン（1736-1770）を、クックは博物学者ジョゼフ・バンクス（1743-1820）やヨハン・ラインホルト・フォルスター（1729-1798）およびその息子ゲオルク（1754-1794）、画家ウィリアム・ホッジス（1744-1797）をともなっていた。かれらの探検航海は、地

球の南半球にその存在が想定されていた未知の大陸テラ・インコグニタの探索などを目的としていたが、博物学および地理学のデータを収集かつ記録して、ヨーロッパに持ち帰ることが前提となっていたからである。また、同行した専門家たちだけでなく、ともに探検をおこなう海軍将校たちも、海軍で数学や天文学の教育を受けていた。クックは代数学や天文学を学び、自分自身で作図のための測量ができたし、ブーガンヴィルは26歳で『積分論』を著した数学者でもあった。つまり、クックやブーガンヴィルの探検航海は、すでに投機的商人や海賊によってなされていたそれ以前のものとは質的にまったく異なる様相を呈していたのである⁶⁾。

探検航海の新時代到来を告げる航海記と考えられるのは、ウィリアム・ダンピア(1651-1715)⁷⁾の『最新世界周航記』(1697年)である。ダンピアはイギリスの海賊であったが、その航海記には、地理学および博物学に関する内容の記述が多く含まれており、鋭い観察眼にもとづく考察を見いだすことができるものであった。それゆえ、ダンピアは「喜びをもって研究する精神、および珍しい鳥獣や人間を見て養われる想像力を満足させる点で、抜群であり、……考察は、流血や戦闘の硝煙よりも珍しい事物に向かい……黄金の筆は、帝国建設の物質主義に一条の人間的かつ科学的啓蒙の光を与えた」⁸⁾と評価されたのである。ダンピアの『最新世界周航記』は、科学的な記述スタイルを意図的に用いて書かれた最初のものであったと思われるが、30年間で6版を重ねたところからも⁹⁾、かなり好評を博したことがうかがわれる。

ちなみに、この航海記の記述のあり方は、デフォーの『ロビンソン・クルーソー』や、この時代のもうひとつの重要な旅行記であるジョナサン・スウィフト(1667-1745)の『ガリヴァー旅行記』(1726)が現実の旅行記として公刊されたという根拠の前提となっている。ロビンソンの世界航海編ともいべき『ロビンソン・クルーソー』第2巻はダンピアの航海記に依拠して書かれており¹⁰⁾、また『ガリヴァー旅行記』の序文では、ダンピアはガリヴァーの従兄だと言及されているからである¹¹⁾。つまり、このふたつの旅行記は、まるで現実の旅行記であるかのように描かれている。リアリズムの効果を高めるために、編纂者の序文や注のほか、現実存在する、または存在しない旅行記や著作からの引用、記述の正当性の強調がレトリックとして用いられているのだ¹²⁾。デフォーとスウィフトの旅行記の成功によって、このふたつの旅行記は、以降のフィクションの旅行記の範例となったといえるだろう。

これと同時に、ユートピア文学¹³⁾、想像の異世界旅行記、ピカレスクロマン、デフォーの小説に登場するフライデーのモデルを提供した「高貴な野蛮人」の神話といった、ほかの文学ジャンルも同じく影響を受けずにはいられなかった¹⁴⁾。これらのジャ

ンルによって、ロビンズナーデはさらなる変化のトーンをあたえられることになるのだが、物語の中心には、デフォーによるオリジナル小説以来のモチーフである、無人島を開拓するという作業過程がいつもあることが、古代や中世に書かれた旅行記とは決定的に異なるのである。

4 無人島の開拓

ロビンズナーデの物語の始まりはつねに、主人公やそのグループが無人島に漂着するところから始まる。主人公たちの人数は、時代がくだるたびに増えていく傾向にある。ヨハン・ゴットフリート・シュナーベルの『フェルゼンブルク島』（1731年）では4人、ヨアヒム・ハインリヒ・カンペの『ロビンソン・ジュニア』（1779年）ではひとり、ヨハン・ダーヴィット・ヴィースの『スイスのロビンソン』（1812年）では両親と4人の息子たち、ジュール・ヴェルヌの『2年間のヴァカンス（十五少年漂流記）』（1888年）では14人の白人とひとりの黒人の少年といったような人数構成である。

主人公たちの人数がだんだんと増加していくにもかかわらず、かれらはみな同様のやりかたで無人島生活を始めるのだ。つまり、主人公たちは、島の住民たちに出会うことはないが、そのかわりに島の海辺に難破船を発見し、その難破船から、水や食料、種々の道具や機械、銃と火薬を手にするのである。したがって、主人公たちはあらかじめ、無人島生活の最初に多くの便利な道具を持ち込んでいるのだ。このことは、ロビンソンのモデルになったアレクサンダー・セルカークのばあいと同じスタート地点に立ったことを示している。というのも、セルカークもまた、「衣類と寝具、それに火打ち石銃、火薬若干、弾丸、たばこ、手斧、ナイフ、薬缶、聖書、日用品若干、コンパスや分度器などの製図用器具、それに書物若干」¹⁵⁾といった最低限の道具類をやはり持ち込んでいたからである。たとえば、『スイスのロビンソン』の家族たちが発見した難破船は、植民地貿易に向かう船であったし（すなわち、植民地を開拓するための道具や設備がそろっているということ）、カンペのロビンソンは物語冒頭ですべての持ち物を失うが、物語中盤ではやはり、漂着した難破船を発見する。つまり当初から、ロビンズナーデの主人公たちはたいてい、物語作者たちによって、無人島開拓の準備がなされているのであった。

ヨーロッパから便利な道具を持ち込むことは、主人公たちのさまざまな能力とともに、無人島開拓の物語にとって必要不可欠である。かれらの性格は、行動力と忍耐力

をともない、つねに意欲的で有能であることが多い。このことはデフォーのオリジナル・ロビンソンからすでに該当しているのであるが、かれは難破して無人島生活を始めるまえに4年間、農園を経営して、製糖技術を習得しており¹⁶⁾、船員として5度の航海に出ていたのだった¹⁷⁾。『スイスのロビンソン』の父親は博覧強記で、博物学にも詳しく、息子たちにたくさんの技術を習得させるのである。

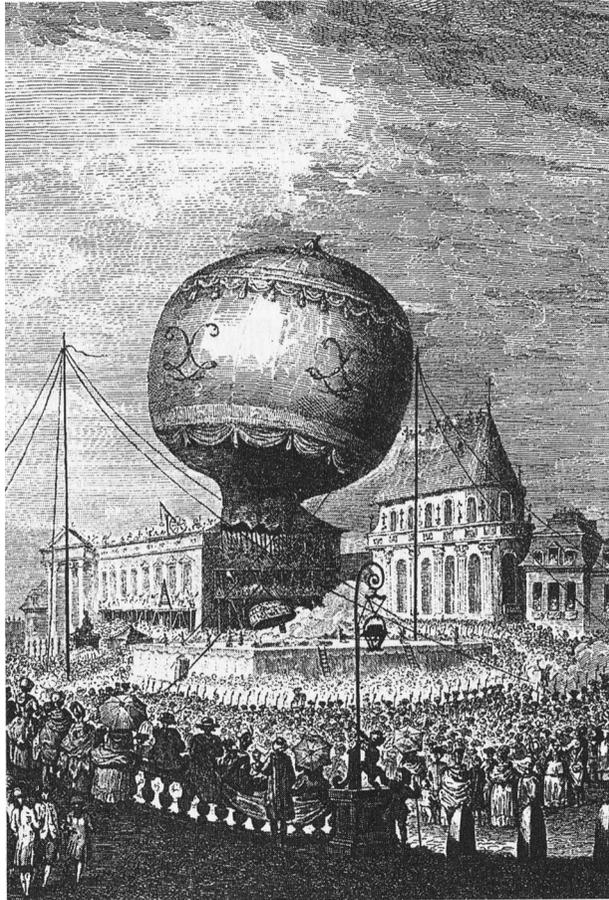
食料と道具を確保したあとに、ロビンゾナーデの主人公たちはいよいよ無人島の開拓に着手する。さらに多種多様な道具が発明され、住居を整え、農園を営み、狩りをおこない、羊や鶏を飼い、食料を備蓄し、砦を築く。かれらの生活圏はみるみる拡大し、ヨーロッパの文明によって手を加えられた空間が増大していく。島のさまざまな場所、動植物には、ヨーロッパに由来する名称があたえられ、島の地図が描かれて、自然事物・事象の特徴が記入される。島にある自然物のひとつひとつは対象として記録され、ヨーロッパにおける分類体系に組み込まれることによって、島の所有を確認するのである。

5 自然科学と航海記

ロビンゾナーデにおける島の描写は、実際の航海記、たとえばクックやブーガンヴィルの航海日誌や航海記、フォルスター父子、カルステン・ニープール、ベルナンダン・ド・サンピエールの旅行記（航海記）のものと同様にそれほど相異なるものではない。つまり、書簡体形式あるいは年代順で書かれていようと、島に関する博物学および地理学的な記述方法は、航海記とフィクションの旅行記とともに共通で、双方のジャンルにおいて、気候、地形、水質、鉱物界、植物相、動物相についての詳細な記述や、それらに関する多彩な観察がみられるのである。

すでに言及したとおり、18世紀後半の探検航海には多くの専門的な学者が同行し、かれらの活動によって島の自然のデータが収集されたのだったが、これが意味するのは、地球を所有しているのは、もはや海賊や投機的商人ではなくて、学者たちであるということなのだ。

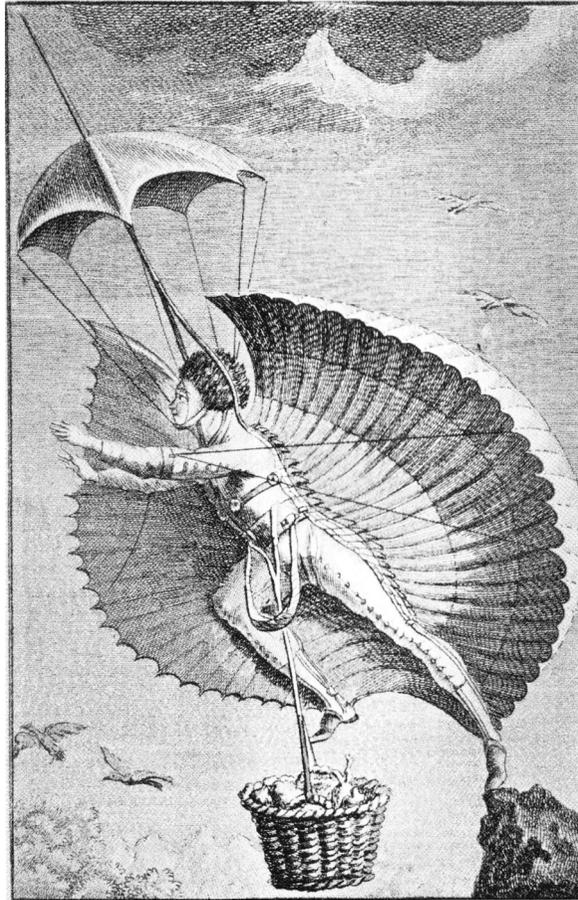
学者たちが航海に同行するという科学的探検航海の組織設定は、以後のロビンゾナーデの範例となって、それは虚構の旅行記に取り入れられることになった。カール・イグナツ・ガイガーの『地球人による火星への旅』は1790年に匿名で出版されたが、このテキストはいわゆるSF小説に属するものだ。そして、火星への旅行という舞台設定をリアルなものにするために、当時は新奇な事件であった1785年のモンゴル



図版2 モンゴルフィエ兄弟によって1783年にヴェルサイユでおこなわれた気球の実験。鶏と羊とアヒルが載せられていた。Hermann Bausinger, Klaus Beyrer, Gottfried Korff (Hg.): Reisekultur. Von der Pilgerfahrt zum modernen Tourismus. 2., Aufl. München: C. H. Beck 1999, S. 214.

フィエ兄弟の気球実験の成果が織り込まれていた。すなわち、ジュール・ベルヌを先取りするかのように、主人公たちは気球に乗って、火星の国々を旅するのである¹⁸⁾。そのほか、この旅にはふたりの「博物学者 (Naturkundige)」¹⁹⁾が同行して、さらにフリードリヒ・ニコライが1781年にドイツとスイスを旅行したときの馬車に装着されていた「路程計 (Meilenmesser)」²⁰⁾を気球に装備するといったほどに、同時代の自然科学の新技术や当世事情を物語の枠組みに投入することで、ガイガーはこのユートピア小説の設定を徹底的に作り込んでいったのである。

この斬新さは、ガイガーの小説よりも少しさかのぼった時代の架空旅行記をみれば



図版3 レティフ・ド・ラ・ブルトンヌ『南半球の発見』（1781年）の扉絵。
図版2の気球と比較すると、現代の視点ではあまりに空想的な人工
翼のイメージである。Rétif de la Bretonne: La Découverte australe.
Bd. 1. Genève [u.a.] : Slatkine 1988, frontispice.

わかる。ルイ＝セバスチャン・メルシエの『紀元2440年、またとない夢』は1771年に匿名で出版されたもので、物語は700年後の未来都市パリの見聞録であるが、主人公はただ700年間眠り続けて、未来へたどりつき、最後には夢落ちで終わる²¹⁾。18世紀後半において、先の時代を明確に提示する未来小説という発想はかなり斬新な部類に属するだろうが、夢落ちという時間移動の設定についての目新しさはまったくない。くわえて、レティフ・ド・ラ・ブルトンヌの『南半球の発見』は1781年に刊行されたが、主人公が南太平洋にある架空の島国を探訪していく物語である。しかし、どのようにして南太平洋まで移動するのかといえば、背中に装着した機械じかけの翼で主人

公たちは飛んでいくのである。モンゴルフィエ兄弟の気球実験の2年前に書かれたゆえのユートピア小説の枠組みであるが、人工翼のメカニズムについてはかなり詳細な記述があるとしても²²⁾、飛行の発想がダイダロスの時代にまで退化しているのであって、ガイガーの設定のリアリズムには遠く及ばないのである。

6 教育と植民地運営

ロビンゾナーデで描かれるところの、「島」という閉鎖空間を一種の庭園と結びつけて、児童教育の場として設定したのは、ジャン＝ジャック・ルソー（1712-1778）であった。その教育論の書『エミール』（1762年）で、ルソーは生徒に対して教訓と娯楽を長期にわたって提供することが可能とされる唯一の書物に言及している。

「この一巻だけが長い期間にわたってかれの書棚におかれる書物になるだろうし、それはまたそこにいつまでも特別の地位を占める本になるだろう。それは自然科学にかんするわたしたちの話はすべてのその注解となるにすぎないようなテキストになるだろう。[……] いったい、そのすばらしい本とはどんな本なのか。アリストテレスか、プリニウスか、ビュフォンか。いや、ロビンソン・クルーソーだ」²³⁾

ルソーにとっては、デフォーのオリジナル小説で構築された島は、実践的な教育の場であった。この理念を、みずからの手になるロビンゾナーデである『ロビンソン・ジュニア』（1779年）に取り込んで、さらに推し進めたのが、ヨアヒム・ハインリヒ・カンペである。カンペ自身の経歴をみると、そのロビンソン改作がなされるべくしてなされたものだとわかるだろう。18世紀後半のドイツの教育論で有名であったヨハン・ベルンハルト・バゼドーの実験学校、汎愛学舎（Philanthropinum）での教歴にくわえて、アレクサンダーとヴィルヘルムというフンボルト兄弟の家庭教師でもあった。また、15世紀の大航海時代を描いた、やはり子ども向けの『アメリカ発見』という3部作の歴史書を著した。しかも、クックの第2次世界航海に博物学者として参加し、のちにその航海記を出版したフォルスター父子とも友人なのであった²⁴⁾。

カンペの『ロビンソン・ジュニア』がほかのロビンゾナーデと少し異なるところは、父親が30夜にわたって、ロビンソンの無人島生活の顛末を、子どもたちに語るという構成になっており、この父親が、主人公の行動をめぐって逐一、博物学や地理学などの自然科学のさまざまな知識を詳細に注釈していくのである。

デフォーのロビンソンがいわばアダム・スミスのいうところの「ホモ・エコノミクス経済人」である
 すれば、カンペ版の主人公クルソー・ロビンソン²⁵⁾は、「ホモ・エドゥカンドゥス教育されるべき人間」で
 あるゆえに、無人島にはなにも持ち込むことも許されない。自身の教育のために、必
 要なものはすべて自身でまかなわなければならないからである。それゆえにたとえば、
 かれは漁のための網をつくるのには10回以上、矢と弓をつくるのに20回以上も失敗
 させられるのであって、最終的には、地理学、植物学、博物学、操船術を身につける
 ことになるのだった。

ところで、近隣諸島の住民であるフライターク（フライデーのドイツ語）が樹皮か
 ら衣服を仕立てたり、骨やサンゴから小道具をつくる描写は、ポリネシアに関するク
 ックの航海記を参照していることが指摘されているが²⁶⁾、カンペとフォルスター親子
 との交友関係をかながみれば、もちろんゲオルクの『世界周航記』もそのマテリアル
 となっているのはまちがいないだろう。

カンペの『ロビンソン・ジュニア』と同じ年の1779年に出版された、注目すべきロ
 ビンゾナーデがもうひとつある。ユートピア小説『ベルフェゴール』で知られるヨハ
 ン・カール・ヴェーツェルの『改作ロビンソン』である。しかも、ヴェーツェルもま
 た汎愛学舎での教職経験をもっていたためであろう、カンペとヴェーツェルのロビン
 ゾナーデは当時、さまざまな書評で比較された。

ヴェーツェルの『改作ロビンソン』は、前半のストーリーはデフォーのオリジナル
 をよく踏襲しているが、むしろ著者の意図は後半部分の人間社会の構築過程にある。
 それゆえに、オリジナル第2部の世界旅行の前半で、かつての無人島に立ち寄って、
 島の発展に寄与する部分をとくにクローズアップしている。ヴェーツェルの意図は、
 ロビンソンの島で人間社会が構築されていく過程を丹念に描いていくことで、当時の
 社会批判をおこなうことにあったといえよう。当時の書評群の結論としては、カンペ
 のロビンゾナーデは子ども向きで、ヴェーツェルのものは大人向きだとされたよう
 である²⁷⁾。

くわえて、ヴェーツェルのこのロビンゾナーデも、同時代の航海記を取り込んでいる
 ことは明らかで²⁸⁾、ゲオルク・フォルスターの『世界周航記』の序文に言及してい
 たり²⁹⁾、タヒチの言語の性質についての具体的な記述は、フォルスターの記述と同様
 ののである³⁰⁾。つまり、カンペもヴェーツェルも、クックの世界航海を中心とした航海
 記から、南太平洋の自然や住民の習俗についての情報を参照し、自身の描く無人島の
 描写に転用することで、やはりロビンゾナーデにおける無人島描写のリアリズムを高
 めようとしたのである。



図版4 ヨアヒム・ハインリヒ・カンペの初版『ロビンソン・ジュニア』（1779年）の扉絵。父親の話す物語を聞くために、木陰に家族が集まっており、その木には地図がかかっている。Daniel Nikolaus Chodowiecki: Das druckgraphische Werk. Hannover: Galerie J. H. Bauer 1984, S. 106.

カンペの教育的ロビンゾナーデの系譜上で頂点に位置するのは、ヨハン・ダーヴィッド・ヴィースの『スイスのロビンソン』（1812年）である。クルーゼンシュテルンによるロシア初の世界航海（1803-1806年）に参加した船員の手記が下敷きとなっているが³¹⁾、主人公の家族が乗っていた船は植民地へ向かう途上にあるという設定だったために、難破したその船から持ち出されるのは、以下のような多くの実用的な道具や有用な家畜であった。

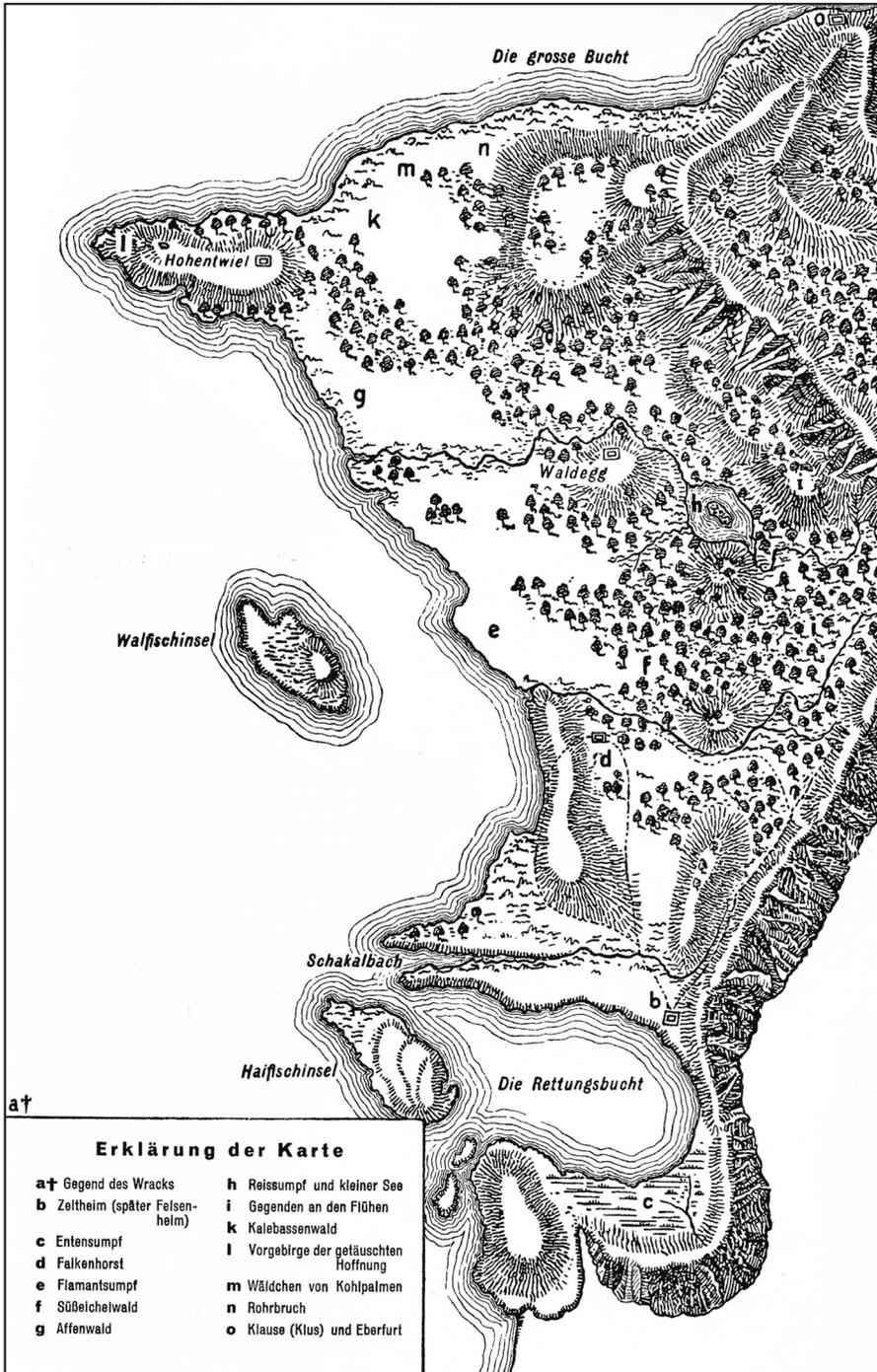
「猟銃2丁、火薬、散弾、銃弾、[……] 釘、斧1本、ハンマー1丁、[……] ペン

チ1丁、錐も含めたノミ2、3本、鶏数匹、[……] 雌牛1匹、ロバ1匹、ヤギ2匹、雄羊1匹と羊6匹³²⁾、「船大工と箱細工師の道具箱、[……] あらゆる種類のヨーロッパ産の果樹の苗木24本、[……] 砥石2、3丁、馬車や荷車などの車輪数輪、鍛冶用道具1式、鋤の刃、鎖、手臼、鉄線と銅線、トウモロコシ、エンドウ、カラスムギ、ソラマメの入った袋、[……] 小型の手臼³³⁾、「多くの海図、数学および天文学用器具数種と立派な地球儀、[……] 珍しい装飾のついた置時計と時打時計、[……] 航海用時計³⁴⁾

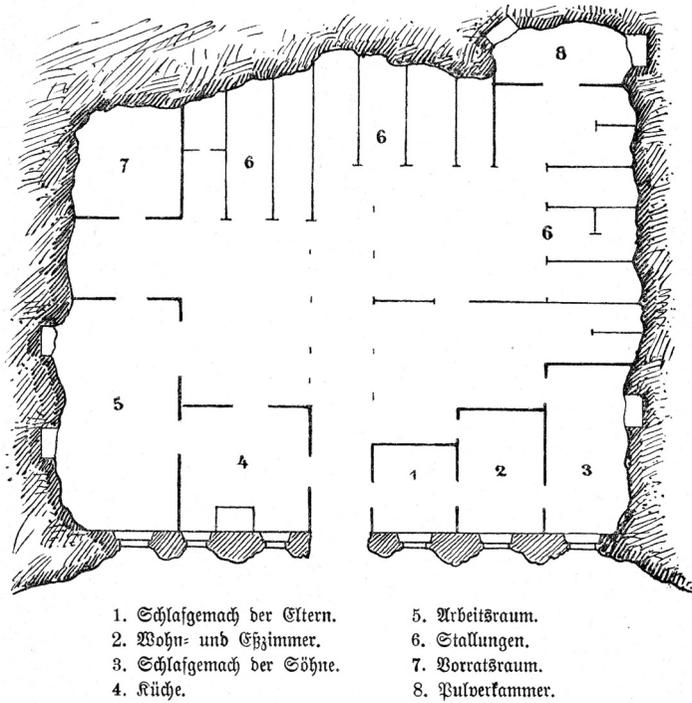
ほかに、この主人公一家は、「一種の2輪の荷車³⁵⁾、防水加工の「長靴³⁶⁾、「麻梳き機³⁷⁾、「アザラシの腸製防水ズボン³⁸⁾、「2門の大砲装備の堡壘³⁹⁾」といった多くの発明をおこなっている。なかでも、最大の施設は偶然に発見された巨大な洞窟に設置された博物館である。家族が住んでいるその洞窟の博物館については、このように記されている。「わたしたちの小さな博物館では今日ではもう、多くの収集品と珍品が展示されていて、何人ものヨーロッパの教授たちがうらやむほどでしょう⁴⁰⁾。その収蔵品は、自分たちで作成した巨大なヘビヤクマの剥製、博物学の本に載っているようなすばらしい水晶などである⁴¹⁾。そして、こうした洞窟を住居にする行為こそ、デフォーのオリジナルから、カンペ、ヴェーツェル、ヴェルヌにいたるまで共通の、ロビンゾナーデにおける無人島生活の記号でもあるのだ⁴²⁾。

ヴィースのロビンゾナーデは、無人島生活の描写に関しては、それ以前のものにはみられなかったほどの進歩があり、とくに科学技術については非常に多くのものを取り込んでいる。『スイスのロビンソン』における無人島生活は、いわば植民地開拓の理想的な機会を提供する場として描かれており、島という閉ざされた空間は、ルソーやカンペの教育理念を实践する場であると同時に、入植と開拓を实践する場でもある。

また、ヴィースのロビンゾナーデには、数多くの学術的な探検と実験のエピソードが挿入されていて、このテキスト全体がまるで、多くの航海記と自然科学のデータの百科事典ともいうことができるであろう。島の動植物や自然についての詳細な描写は、島の閉鎖空間のなかに、彩りと興行きをあたえ、パノラマ的な経験空間にしている。テキストに付随する島の地図や住居にしている洞窟の内部図がそれを証明しているだろう。



図版5 ヨハン・ダーヴィット・ヴィース『スイスのロビンソン』（1802年）に
 付属する「新スイス島」の地図。島の地形、自然の状態、自分たちで
 命名した地名などがかなり詳しく記入されている。Johann David Wyss:
 Der Schweizerische Robinson. Zürich: Orell Füssli 1962, S. 379.



図版6 『スイスのロビンソン』の家族が住んだ洞窟の内部が細かく仕切られている。1. 両親の寝室、2. 居間および食堂、3. 息子たちの寝室、4. 台所、5. 勉強部屋、6. 家畜部屋、7. 貯蔵室、8. 火薬庫となっている。しかし、この間取り図には、博物館がどこに位置しているかは、記載されていない。Johann David Wyss: Der Schweizerische Robinson. 6., Aufl. Bd. 1. Zürich: Orell Füssli 1895, S. 287.

7 海上の船室と陳列室

ジュール・ベルヌの『2年間のヴァカンス』（1888年）は、14人の白人少年とひとりの黒人少年を主人公にすえた正当なロビンゾナーデである。ちなみに、ヴェルヌの少年時代の愛読書は、デフォーのオリジナルやヴィースの『スイスのロビンソン』を含む各国のロビンゾナーデであった⁴³⁾。『スイスのロビンソン』で、息子たちがガチョウを調教して馬のように乗りこなすエピソードがあるが、『2年間のヴァカンス』でも同様に、少年たちがガチョウを乗りこなそうするエピソードが挿入されているのは、ベルヌからヴィースへのオマージュとして考えられる⁴⁴⁾。

19世紀後半のヴェルヌは、ロビンゾナーデの様式に探検航海記の科学性を取り入れるということをおこなっている。かれの科学冒険小説には、学者が主人公として探検

や冒険に参加することが多く、また科学のテーゼが物語の枠組みとなっていることも多い。『気球によって5週間』（1863年）では、地理学者ファーガソン博士がアフリカ大陸を横断し、『地底旅行』（1864年）では、地質学者で鉱物学者のリーデンプロック教授の地底探検が、『地球から月へ』（1865年）では、数学や物理学にもとづく弾道学が物語の設定の根拠となっていて、自然科学がヴェルヌのこうした小説の枠組みを構成しているのである⁴⁵⁾。

『海底2万里』（1870年）で描かれるのは、パリの自然史博物館のアロナックス教授が潜水艦ノーチラス号に乗って体験する大洋航海であるが、海洋世界の未知の現象や動物に関する博物学的な描写が多く挿入される。このような描写にくわえ、一人称で書かれて、時間軸を明確する日付とともに航海のできごとが描かれていくこの小説は、まさに航海記のテキストの文体を意識的に模しているのは明白である。つまり、主人公アロナックス教授のモデルこそはまさに、ブーガンヴィルやクックの世界航海に参加したコメルソン、ジョゼフ・バンクス、フォルスター父子といった自然研究者たちである。つまり、『海底2万里』はかれらの探検航海記あるいは海洋生物群についての博物学のパロディーであると同時に、また海の百科事典という体裁になっているのであって、ヴィースの『スイスのロビンソン』に代表されるロビンズナーデがいわば無人島の博物誌となっているのと同様である。

ロラン・バルトは、『海底2万里』のテキスト世界について、以下のように述べている。

「船は基本的な象徴でさえありうる。それは更に深く、閉鎖の記号である。船舶の趣味は常に、完全に閉じこもること、品物を可能なかぎり多数手もとにおくこと、絶対的に限定された空間を所有することの喜びなのだ。[……] 船は交通手段である前に居住の事実である。さてジュール・ヴェルヌのすべての船は、完璧な《いりばた》であり、その巡歴の広漠さが更に、閉じこもりの楽しさ、その内部の人間らしさの完璧さを増すのだ。ノーチラス号はこの点で、愛らしい洞窟である。この、裂け目のない内部性の中から大きなガラス窓を通して空漠な水中の外部を見ることができ、そのようにして同じ一つの身振りによって反対物のおかげで内部を規定することができる時、閉じこもりの喜びはその絶頂に達する」⁴⁶⁾

このバルトによるヴェルヌ作品に対する指摘は、18世紀の探検航海やロビンズナーデ全般の本質をも包含するものだ。18世紀の探検航海は地表の大洋を縦横無尽にかけめぐる拡大のベクトルの運動性をもつものであるが、その一方で、この航海によって

蓄積された知のデータは、博物学者たちの船室へと収集され、分類と記録という行為によって濃縮と融合を繰り返し、集約していく運動性のなかにある。このばあい、自然研究者たちの船室（Kabine）はまさしく、博物学の陳列室（Kabinett）でもあるということだ。ノーチラス号自体、その船体内部には、12000冊の文学や自然科学の蔵書を誇る図書室と、古代の彫像や巨匠の絵画、著名な音楽家の楽譜、世界中の海から採用した貴重な海産物、とくに貝類の標本コレクションをおさめる博物室が存在していた⁴⁷⁾。すなわち、経験空間の拡大と知の凝縮という相反するふたつの運動性が生み出す探検航海のダイナミズムを、バルトは指摘しているのであって、しかもそれは、現実の航海記と、フィクションとしてのロビンゾナーデにおける知的行為の本質的な連関関係をも明らかにしているのである。

そして、このふたつの運動性はロビンゾナーデにおける「島」という閉鎖空間にもあてはまる。ロビンソンたちにとっては広すぎるが総じて閉鎖空間である無人島を、探検航海の船や博物学者と同様に、主人公たちは探検していくが、そのかれらが拠点とするのは、バルトが奇しくもノーチラス号に喩えたところの、無人島内に存在する「洞窟」なのである。ロビンゾナーデでは、ロビンソンたちが「洞窟」に住むことが共通の記号であることはすでに言及したが、このばあい、閉鎖空間である島のなかにある、もうひとつの閉鎖空間が「洞窟」である。ロビンソンたちはその「洞窟」で食料の備蓄、道具の管理、家畜の飼育などをおこなうのだが、「洞窟」とは同時に、難破船から持ち出した地図や本などの知識媒体を保管する場所でもある。『2年間のヴァカンス』の少年たちは、勉強室をつくり、そこで難破船から拾い上げた本をもとに勉強会や討論会をおこなう。既述の『スイスのロビンソン』の家族たちによる「洞窟」は最も象徴的で、この「洞窟」のなかに博物館を設置する。ロビンソンたちの「洞窟」をめぐるそうした行為こそ、知の凝縮という運動性をもった探検航海に参加している博物学者たちのものとまったく同質の行為であって、この知的行為の相似関係が探検航海記とロビンゾナーデにおける記述内容の同質性を如実にあらわしているといえるだろう。

8 ジュール・ヴェルヌのロビンゾナーデたち

住居が確保されると、ロビンソンたちは暦を作成したり、日記をつけ始める。デフォーとカンペのロビンソンは木に刻んだ傷で日数を数える。ヴィースの家族たちは難破船から時計を、ヴェルヌの少年たちは時計および航海用時計を入手する。このよう

にして、かれらはヨーロッパの時間概念を無人島に持ち込み、島の時間を支配していく⁴⁸⁾。そうした行為はのちの歴史を先取りしていた。1884年にグリニッジ天文台の位置を経度0度として、この地を基点に世界のタイムゾーンを決定するグリニッジ標準時（GMT）が全世界に導入されると、世界は均質な時間のネットワークで覆われることになるのである。1867年に書かれた『海底2万里』のノーチラス号は、この事態を予測するかのように、ヨーロッパが張りめぐらした経度と緯度の網の下を文字通りに潜航するのであって、さらにはヨーロッパと植民地を往還するヨーロッパ船舶を攻撃するエピソードが描かれている⁴⁹⁾。

ロビンゾナーデの物語の終焉には、ヨーロッパ船籍の船が無人島へ来航し、緯度や経度にもとづいて、無人島の位置を主人公たちに教えてくれる。そして、その来航者たちの海図に、この島の位置が正確に特定されると、それがもはや無人島ではなく、ヨーロッパによる植民の対象となったことを示しているのである。しかし、これはいわば当然の帰結に過ぎない。無人島が植民の対象となる過程の起点は、すでにデフォーによる最初のロビンゾナーデに胚胎されていた。ロビンソン・クルーソーが難破して、無人島で生活する契機になった航海の目的はそもそも、ブラジルにおける農園経営のための奴隷の買いつけであったからである⁵⁰⁾。

ロビンゾナーデ研究者のマルティン・グリーンによれば、ロビンゾナーデの連鎖の歴史そのものがひとつの物語であるが⁵¹⁾、ここまでみてきたように、ロビンゾナーデとは自然科学の発展、無人島開拓技術や運営方法、啓蒙主義的教育観によってさまざまに影響されてきた物語群であったことがわかるだろう。ジュール・ヴェルヌによるロビンゾナーデの多くもまた、この系譜上に属しており、とくに『2年間のヴァカンス』は19世紀後半における教育的ロビンゾナーデの代表格でもあった。

ヴェルヌのロビンゾナーデのなかで、とくに啓蒙主義的な自然科学信仰がよく表れており、自然科学の進歩がかつてのロビンソンの無人島生活をいかに変えてしまうかを示唆してくれるのが、『神秘の島』（1874-75年）である。この物語の背景には、アメリカ南北戦争があり、南軍の捕虜であった主人公たちが気球（!）で脱出して、太平洋上の無人島にたどりつくという時代と舞台の設定は、ヴェルヌによるロビンゾナーデのみごとな換骨奪胎のテクニクを示している。くわえて、無人島生活の開始時にデフォーやヴィースの主人公たちやセルカークの窮乏状態に言及したり、難破した海賊船からさまざまな便利な道具を運び出したり、「洞窟」に暮らしたりなどのエピソードも欠かすことはなく、このロビンゾナーデの正統性は明確に主張されている。

『神秘の島』の主人公は5人で、技師、博物学に詳しい少年、新聞記者、水夫、黒人

の召使いである。とりわけ、技師のサイラス・スミスは「ひとつの宇宙 [……]、学問のすべてと人間の知能のすべてを合体させたもの」⁵²⁾とまでいわれるほどのまさしく全能の人物で、かれの知識と技術が無人島生活を一気に文明的なものに変貌させていくのである。

石灰石と石英から陶器用の陶土を混ぜ合わせ、六分儀もなしに島の緯度と経度を計測し、鉄鉱石から鉄器を鑄造し、ニトログリセリンを化合し、その爆発によって洞窟内部を大きくしたあと、その内部に貯蔵室、作業部屋、そしてやはり博物館を設置する。船をつくり、電信機を敷設し、難破船から入手した写真機に必要な感光剤、洗濯のためのさらし粉、タバコなどもすべての島の資源から調達するほか、洞窟内部の水力エレベーター設置まで計画するのだ。仲間の水夫はサイラスを信頼するあまり、運河、採掘場、鉱山、鉄道まで夢見ていた。

このロビンゾナーデは、自然科学の力による最も合理的な無人島開拓を描いており、知識の収集とその利用という啓蒙主義の理念を実現している。多くの自然科学の知識が頻繁に挿入されるが、物語の中心にあるのは、もはや教育ではなく、原因と結果の連鎖のなかに現出する、啓蒙主義の成果としての近代自然科学がもつ巨大な可能性なのである。このロビンゾナーデにおける未開の島は、自然科学の知を実践する実験室であって、その主人公たち、とくに万能のエンジニアであるサイラス・スミスは、科学知識を思いのままに利用して、無人島を開拓する自然科学者なのだ。

『神秘の島』とならんで、ヴェルヌによる注目すべきもうひとつのロビンゾナーデは、『ロビンソンたちの学校』（1882年）である。この小説では、甥である主人公に、その伯父が、無人島生活を演出するというもので、ライオンまで出現するが、物語の最後で、すべてはこの伯父のしわざであったことがわかるという物語である⁵³⁾。この作品からうかがえるのは、無人島での実践的な教育という理念そのものが陳腐になっており、そのような島自体がもはや存在していないという事実、ヴェルヌがすでに気づいていたということだ。

『2年間のヴァカンス』や『神秘の島』といった正統なロビンゾナーデのほか、一連の科学冒険小説を書いたヴェルヌであるが、その一方で、『ロビンソンたちの学校』というロビンゾナーデのパロディや、ヨーロッパの植民地主義政策を激しく憎悪するインド人のダカール王子という素性のノーチラス号船長ネモを『海底2万里』や『神秘の島』⁵⁴⁾に登場させている。ジュール・ヴェルヌのこの態度はアンビヴァレントであって、教育的ロビンゾナーデの神話や、ロビンゾナーデと植民地主義との結合についても、懐疑的で冷静なまなざしを投げかけていたといえよう。

9 現代の探検する開拓者と学者

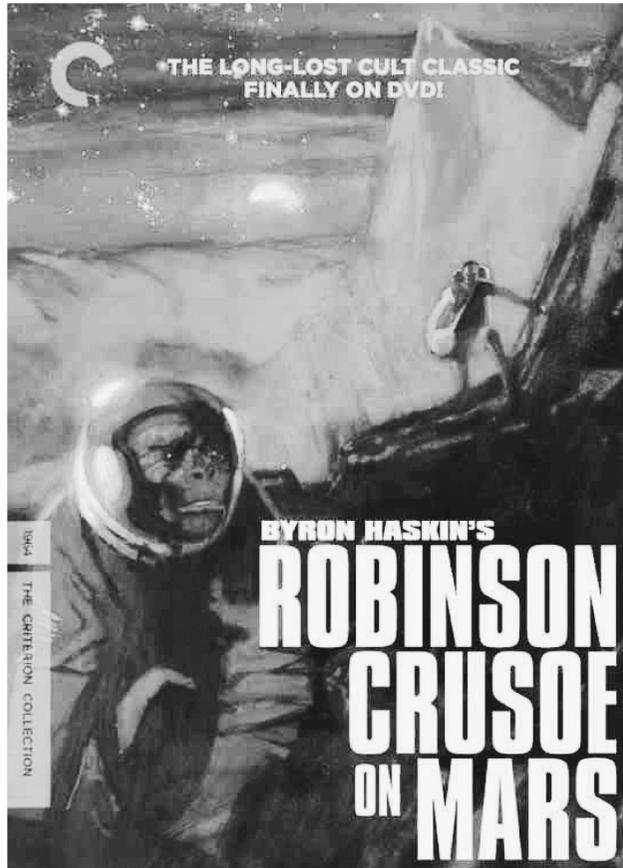
文学モチーフ研究の視点からすれば、「島」というトポスは、物語の様式としてのロビンズナーデを生き長らえさせ、作家たちの想像力を刺激し続けてきたということになるだろうか。いかにして、主人公たちを無人島でサバイバルさせるかというテーマが、住居の獲得、耕作、狩猟、漁、その他の食料の調達などの、無人島における多種多様な人間活動の描き方をさせることになり、それと同時に、いかにその描写の差異を生じさせるかということが作家たちの力量を試すのである。これらの生活描写の様式が時代ごとに差異化していくがゆえに、ロビンズナーデは非常に広範囲に及ぶ文学ジャンルになったのだろう。

ロビンズナーデを愛しつつも、これに懐疑的であったヴェルヌの死後100年たった現在においては、ロビンズナーデが植民地主義の神話的テキストにして動因であったとはいえそうである。そして、現代のロビンズナーデは、サイエンス・フィクションのなかに見いだされるのであって、冒険の舞台はもはや地球上に浮かぶ無人島ではなく、宇宙空間や未来時間のなかにある。

H・G・ウェルズの『宇宙戦争』（1898年）を1953年に映画化したバイロン・ハスキングが監督したSF映画 *Robinson Crusoe on Mars*（邦題『火星着陸第1号』）が1964年に公開されたが、これは文字どおりに、宇宙船が遭難して、火星でサバイバル生活を送るという、ロビンソンの舞台装置である無人島を火星へと置き換えたストーリーである。そして、この映画のクレジットには、「ダニエル・デフォー原作〈ロビンソン・クルーソー〉より」（Based on Novel “Robinson Crusoe” by Daniel Defoe）と表示されていた。

リドリー・スコット監督によるSFホラー映画『エイリアン』（1979年）は、ある惑星へ地球から移住してきた宇宙植民者たちが、その惑星に生息するグロテスクで人間を捕食する宇宙生物との殲滅戦を展開する物語である。TVシリーズ『スタートレック』（プロデューサー：ジーン・ロッデンベリー、1966-1969年）に登場する宇宙船エンタープライズ号は、さまざまな惑星やそこに住む住民や生物のデータを収集するために、5年間にわたる宇宙での探検航海をおこなうという設定である。未知の地での開拓者や未知の世界に船出する学者というキャラクターは、現代のSFシーンにおいてもよく適応している。『エイリアン』と『スタートレック』というSFタイトルの物語はとくに、続編がシリーズ化されるほどに人気を博した高いエンターテインメント

性をそなえているが、それでもストーリーの根幹には、探検航海記およびロビンズナーデの原型をいまだ留めているといえるだろう。



図版7 バイロン・ハスキンのSF映画*Robinson Crusoe on Mars* (1964年)が、2007年にThe Criterion CollectionというメーカーからDVDで復刻されたさいのDVDジャケット。

注

- 1) M. グリーン (岩尾龍太郎訳) : ロビンソン・クルーソー物語、みすず書房、1993年、27頁参照。
- 2) Vgl. Hermann Ullrich: *Robinson und Robinsonaden. Bibliographie, Geschichte, Kritik.* Weimar: Emil Felber 1898, [Reprint, Nendeln/Lichtenstein: Kraus Reprint 1977] S. 3f. u. 29ff.
- 3) たとえば、Daniel Defoe (Edited by Michael Shinagel): *Robinson Crusoe. A Norton Critical Edition.* New York / London: Norton & Company 1994. にはデフォーが参照できたであろう

第4部 食文化を通して見たアジア・世界の出会い

う4種の資料が収録されている。Vgl. Defoe (1994), S. 227-238.

- 4) アレクサンダー・セルカークの経歴については、以下の書籍に詳しい。高橋大輔：ロビンソン・クルーソーをさがして、新潮社、2002年、64-87頁参照。
- 5) ウッズ・ロジャーズ（平野敬一、小林真紀子訳）：世界巡航記、岩波書店、2004年、122-127頁。
- 6) Vgl. Barbara Korte: Der englische Reisebericht: von der Pilgerfahrt bis zur Postmoderne. Darmstadt: Wiss. Buchges. 1996, S. 42f.
- 7) ちなみに、ダンピアは1703年の2隻の私掠船団による海賊航海を率いていたが、このときの航海で、ダンピアが艦長ではないほうのガレー船にセルカークは船員として乗船していた。そして、ガレー船艦長のトーマス・ストラドリングとの口論から、セルカークはホアン・フェルナンデス島に置き去りにされてしまうのである。高橋大輔（2002年）、78-81頁参照。
- 8) グリーン（1993年）、45頁。
- 9) グリーン（1993年）、44頁参照。
- 10) グリーン（1993年）、44頁参照。
- 11) ジョナサン・スウィフト（富山太佳夫訳）：ガリヴァー旅行記、岩波書店、2002年、7頁参照。
- 12) ポール・アザール（野沢協訳）：ヨーロッパ精神の危機 1680-1715、法政大学出版局、1793年、30-31頁。四方田犬彦：空想旅行の修辞学、『ガリヴァー旅行記』論、七月堂、1996年、325頁参照。
- 13) すでに17世紀には国家小説としてのユートピア文学があった。トマス・カンパネッラ『太陽の都』（1623年）、フランシス・ベーコン『ニュー・アトランティス』（1627年）、ヨハン・ヴァレンティン・アンドレーエ『クリスティアノポリス』（1619年）などである。18世紀後半になると、このジャンルはさらに発展を遂げて、アルブレヒト・フォン・ハラー『ウーゾング』（1771年）、ヨハン・カール・ヴェーツェル『ベルフェゴール』（1776年）などが登場する。これらの小説の主人公たちはさまざまな国を放浪するが、無人島での生活はこのふたつの小説の中心的なモチーフではない。
- 14) 岩尾龍太郎：ロビンソン変形譚小史 物語の漂流、みすず書房、2000年、26-32頁。Green (1990), S. 21f.
- 15) ロジャーズ（2004年）、124頁。
- 16) デフォー（平井正穂訳）：ロビンソン・クルーソー（上）、岩波書店、1967年、52-53頁。
- 17) デフォー（1967年）、16-67頁。
- 18) 村田竜道：放浪作家ガイガーと18世紀末ドイツ、松籟社、1993年、141-201頁参照。
- 19) Vgl. Carl Ignaz Geiger: Reise eines Erdbewohners in den Mars. Faksimiledruck der Ausgabe von 1790. Mit einem Nachwort von Jost Hermand. Stuttgart: Metzler 1967, S. 7.
- 20) Geiger (1967), S. 6. Vgl. Friedrich Nicolai: Beschreibung einer Reise durch Deutschland und die Schweiz im Jahre 1781. In: derselbe: Gesammelte Werke, hrsg. von Bernhard Fabian und Marie-Luise Spieckermann, Bd. 15. Hildesheim, Zürich, New York: Georg Olms 1994, S. 17-22.
- 21) ルイ＝セバスチャン・メルシエ（原宏訳）：紀元2440年 またとない夢、野沢協・植田祐次監修：啓蒙のユートピア第3巻所収、法政大学出版局、1997年、3-17、および211頁参照。
- 22) レティフ・ド・ラ・ブルトンヌ（植田祐次）：南半球の発見 飛行人間またはフランスのダイ

15 世界航海の船室と無人島の陳列室

- ダロスによる南半球の発見—きわめて哲学的な物語、野沢協・植田祐次監修：啓蒙のユートピア第3巻所収、法政大学出版局、1997年、444-445頁参照。
- 23) ルソー（今野一雄訳）：エミール（上）、岩波書店、1962年、325頁。
- 24) グリーン（1993年）、76-85頁参照。
- 25) 名と性を単純に入れ替えただけであるが、これもカンペのロビンゾナーデ改作上の創意のひとつである。
- 26) 岩尾龍太郎：カンペはロビンソン物語をいかに書き換えたか—教育的な、あまりに教育的な物語、西南学院大学国際文化論集第2巻第1号所収、西南学院大学、1987年、319-339頁、334頁参照。
- 27) Vgl. Anneliese Klingenberg: Nachwort. In: Johann Karl Wezel: Robinson Krusoe. Berlin: Rütten & Loening 1979, S. 263-297, hier S. 271.
- 28) 時系列で見ると、クックがハワイ諸島で殺害されたり、フォルスターの『世界周航記』英語版が出版されたのが1777年、ドイツ語版第1巻が出版されたのが1778年、そして、カンペとヴェーツェルのロビンゾナーデが1779年に出版されているのは、当時最新の航海記を参照したといえるだろう。
- 29) Vgl. Wezel (1979), S. 221.
- 30) Georg Forster: Reise um die Welt. Berlin: Akademie 1989, Bd.2, S. 221.
- 31) グリーン（1993年）、102頁以下参照。
- 32) Wyss (1962), S. 10.
- 33) Wyss (1962), S. 102.
- 34) Wyss (1962), S. 206f.
- 35) Wyss (1962), S. 134.
- 36) Wyss (1962), S. 156.
- 37) Wyss (1962), S. 167.
- 38) Wyss (1962), S. 273.
- 39) Wyss (1962), S. 134.
- 40) Wyss (1962), S. 302.
- 41) Vgl. Wyss (1962), S. 227-229.
- 42) デフォー（1967年）、83-84頁。ジュール・ベルヌ：二年間のバカンス、集英社、1993年、138-146頁参照。Vgl. Campe (2000), S. 65f. Wezel (1979), S. 47f. u. 88f.
- 43) グリーン（1993年）、181頁参照。
- 44) Vgl. Wyss (1962), S. 244f. ベルヌ（1993年）、192頁以下参照。
- 45) 芳川泰久：新たな物語の測量者ジュール・ベルヌ、岩波講座文学6所収、岩波書店、2003年、179-194頁、とくに180-181頁参照。
- 46) ロラン・バルト（篠沢秀夫訳）：神話作用、現代思潮社、1967年、68頁。
- 47) ジュール・ヴェルヌ：海底二万里、東京創元社、1977年、103-112頁参照。
- 48) デフォー（1967年）、90頁、ベルヌ（1993年）、73頁参照。Vgl. Campe (2000), S. 67-69f. Wyss (1962), S. 206.
- 49) ヴェルヌ（1977年）、522-534頁参照。
- 50) デフォー（1967年）、58頁参照。
- 51) グリーン（1993年）、1頁参照。

第4部 食文化を通して見たアジア・世界の出会い

- 52) ジュール・ヴェルヌ (大友徳明訳) : 神秘の島、第一部、偕成社、2004年、146頁参照。
- 53) 杉本淑彦 : 文明の帝国 ジュール・ヴェルヌとフランス帝国主義文化、山川出版社、1995年、343-345頁参照。
- 54) ネモ船長は、『神秘の島』の終盤に登場し、その正体が明かされる。ジュール・ヴェルヌ (大友徳明訳) : 神秘の島、第三部、偕成社、2004年、288-302頁参照。